

## (1) 長野市塩崎遺跡群出土鉄剣の基礎的検討

ライアン・ジョセフ (岡山大学)

### 1 はじめに

長野県長野市塩崎遺跡群で出土した鉄剣（以下、本例）は、ガラス小玉とともに木棺墓 SK1198より検出された。土器は出土していないため、詳細な時期比定は困難であるが、隣接する方形周溝墓との関係などから、弥生時代終末期頃に位置付けられる可能性がある<sup>1)</sup>。当該期の長野県域の鉄剣出土例が少ないだけでなく、本例が日本列島における鉄剣の保有や流通を考える上でも大変示唆的な資料である。その出土状況や時期などについては、正式な調査報告書の刊行を待たざるを得ないが、ひとまず本稿では本例の形態的特徴を確認した上で、その意義について述べることにする。

### 2 鉄剣の法量および形態的特徴

まずは、本例の法量および形態的特徴を確認しよう（第1図）。本例は、残存全長22.8cm、身部長13.65cm、茎部残存長9.15cmを測る短剣である。茎部は茎尻が欠損しているが、類例の長茎短剣<sup>2)</sup>の茎部長が通常10cmを前後することから、全長23～24cmに復元できる。よって、本来の身部と茎部の比率は凡そ一対一であったと考えられる。

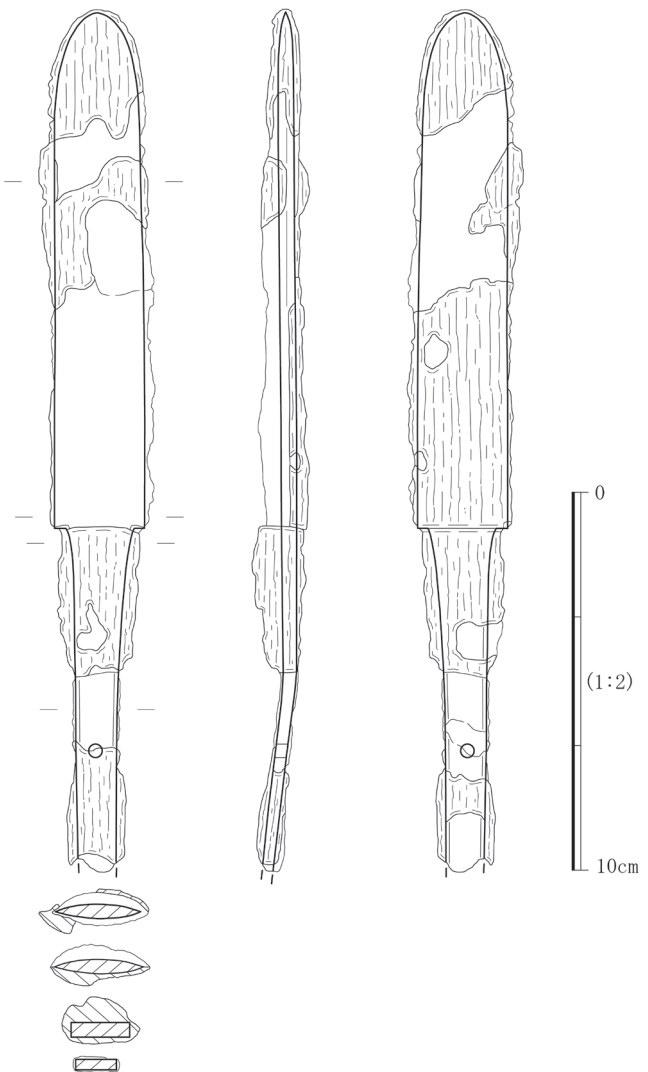
関は、左右の切れ込みがそれぞれ3mmを測る左右対称の直角関である。身部の最大幅となる関幅は2.4cmと細身である。茎部幅は、関に当たる上端部では1.8cm、中間部では1.1cmであり、茎部は緩やかに細くなっていく形状を呈する。茎部側面の軸が若干曲がっているが、接合の影響と考えられ、「折り曲げ鉄剣」ではない可能性が高い。直径4mmを測る目釘孔の存在がX線写真で確認できる。

身部厚は4mm、茎部厚は、上端部では4mm、中間部では3mmと薄手である<sup>3)</sup>。身部横断面形態は、凸レンズ形を呈する。身部横断面形態および厚みを勘案した筆者の分類では、「薄丸短剣」に相当する。

以上を踏まえ、本例は岩井顕彦の長茎短剣Ⅱb類（岩井2007）、杉山和徳のⅢ-2型短剣（杉山

2015）および長茎短身鉄剣A類（杉山2016）、ライアン・ジョセフの長茎短剣Ⅱb式（ライアン2017）および薄丸短剣Ⅱ式（ライアン2021）などに分類できる。

次に、装具の様子を確認しよう。身部および茎部に付着している木質の存在から、本例は鞘および把が装着されていることがわかる。身部の側面に合わせ目がみられるため、鞘の形態は二枚合わせ式（豊島2008a）、把についても、木質が一周するため、一木造り式多方向穿孔型（豊島2004・2008a）であると判断できる。把縁の形状や沈線



第1図 塩崎遺跡群出土の鉄剣

などの意匠により、把装具は細分可能である（岩本2006、豊島2008a）が、本例の遺存状態によりさらなる細分は困難である。

### 3 鉄剣の時期的位置づけ

木棺墓 SK1198は土器が出土しておらず、また他の遺構との切り合い関係がないため、鉄剣そのものからその時期的位置づけについて考えてみよう。

薄手の長茎短剣は、弥生時代後期後葉まで遡る可能性はあるが、大半の出土例は弥生時代終末期以降に位置付けられる（ライアン2017・2021）。本例のように、身部と茎部の比率がほぼ一対一の薄手長茎短剣の盛行期は、弥生時代終末期～古墳時代前期前半を中心とするが、古墳時代前期を通じてみられるため、その下限を限定することは困難である。

二枚合わせ式の鞘は弥生時代から古墳時代にかけて継続的に認められる。また、一木造り式多方向穿孔型把装具は、弥生時代後期後葉まで遡る可能性はあるが、基本的に弥生時代終末期以降に位置付けられる（豊島2004・2008a）。このタイプの把装具は長茎を収めるために創出されたものであるため、上述した長茎短剣と歩調を合わせた動向を示す。

型式学的な変化が少ないため、鉄剣の編年的位置づけは、多くの場合、時期幅を含まざるを得ない。また、遺存状態により、本例に装着されている木製装具から時期を絞ることも困難である。以上を踏まえ、本例を弥生時代終末期～古墳時代前期前半に位置付けることが妥当であろう。

### 4 鉄剣の生産と流通

当該期において長茎短剣は、北部九州・瀬戸内海沿岸地域・北近畿を中心に製作されていた可能性が指摘されている（村上1999、岩井2007、杉山2016、ライアン2017・2021ほか）。北部九州や瀬戸内海沿岸地域において薄手短剣が製作されていた可能性については、大方の見解が一致するところであるものの、北近畿での生産については、見解が分かれている（岩井2007、福島2007）。いずれにしろ、当該地域において薄手の長茎短剣が数

多く分布しており、その流通を考える上で重要な地域と考えられる。

「同形同大品」が西日本に多いことや東日本における鉄製武器の製作水準（鈴木2020）を勘案すれば、本例が東日本諸地域で製作されたと積極的には評価できない。このように、塩崎遺跡群出土鉄剣が弥生時代終末期頃に西日本より流入したと考えた場合、①北近畿から日本海沿岸諸地域を経由する北回りルート、②瀬戸内から太平洋沿岸諸地域を経由する南回りルート（杉山2008）のどちらかを想定することができる。本例に木製装具が装着されていることから、後者の可能性が高い（杉山前掲）。いずれにしろ、その具体的な流通経路については、今後、鉄器、玉類、土器など複眼的に検討する必要がある。

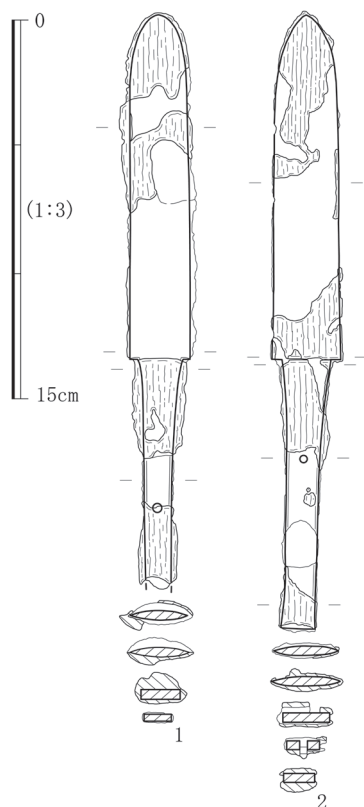
なお、後述するように、本例が初期ヤマト政権による政治的器物の配布が開始された後に属する場合には、弥生時代以来の継続的な地域間関係に加え、善光寺平などの有力（諸）集団への配布という新たなベクトルにも注意を払わなければならない。

### 5 長茎短剣の入手方式に関する予察

最後に、他地域で製作された可能性が高い本例がどのように塩崎遺跡群の運営（諸）集団に入手・保有されたのかについて若干の予察を述べよう。

まずは、同じ長野市に所在する和田東山3号墳（45.2mの前方後円墳）から出土した短剣の法量を確認しよう（第2図-2）。全長24.3cm、身部長13.65cm、茎部長10.65cmを測る長茎短剣である。関幅は2.7cmと細身である。茎部幅は、上端部では1.9cm、中間部では1.25cmを測る。また、身部厚および茎部厚は、それぞれ4mmを測り、身部の横断面が凸レンズ形であることから、筆者の薄丸短剣Ⅱ式に相当する。さらに、木質の付着状況から、鞘および把が装着されていることが明白である。

塩崎遺跡群出土例は、茎尻が欠損しているため、正確な茎部長は不明であるが、興味深いことに、本例と和田東山3号墳出土例の身部長は同一である。鍛造品にもかかわらず法量が概ね一致す



第2図 「同形同大」の長茎短剣  
1. 塩崎 2. 和田東山3号

る点、関幅が細身である点、茎部が緩やかに幅を狭めていく点、そして鞘および把が装着されている点なども酷似した様相として評価できる（第2図）。

この2例の他にも、ほぼ「同形同大」（岩井2007）と評価できる出土例は少なくない。多くは同様に全長23cm～24cmを志向する<sup>4)</sup>が、ここでは、これらの資料の身部長に注目したい。すなわち、福岡県頓田高見遺跡SH3号住居址例が13.4cm、広島県油免遺跡SB61例が13.75cm、香川県平尾3号墳第1主体部例が13.9cm、兵庫県出持2号墳第7主体部例が残13.2cm、田多地引谷7号墓第3主体部例が残13.8cm、梅田東11号墓第1主体部例が13.4cm、京都府奈具岡南1号墳例が13.7cm、ゲンギョウの山4号墳例が13.75cm、群馬県成塚向山1号墳例が13.6cmなどである。身部幅こそ異なるが、同様な長さ、とくに身部長を志向していることが明白である。

こういった「同形同大」と評価できる薄手の長茎短剣は、広域流通品と評価されている（岩井

2007、杉山2015・2016、ライアン2017）が、これら「同形同大」の2例が同じ善光寺平において出土している事実は注目に値しよう。塩崎遺跡群と和田東山3号墳は直線距離で約13km離れているが、千曲川で繋がった同じ小地域といえよう。無論、単なる偶然の産物である可能性は排除できないが、それぞれの長茎短剣の入手契機および保有（諸）集団は、必ずしも無関係ではないと考えたい。

ここでそれぞれの出土遺構の時期が問題になってくる。塩崎遺跡群の木棺墓SK1198は時期比定要素に乏しいが、現段階では、弥生時代終末期頃と推定されている。一方で、和田東山3号墳は、古墳時代前期中葉に位置付けられる（小林編2020）。前者の時期が判然としないため、両者の間に時期的な開きが存在する可能性があるという指摘にとどめたい。時期差を認めた場合、集団内における長期的な保有が想定されよう。

和田東山3号墳から、初期ヤマト政権より配布されたと考えられる（菊地1996、豊島2008bほか）ヤリが出土しているが、古墳の副葬品が様々な入手契機の蓄積からなる複合体（川畑2015ほか）である以上、長茎短剣など他の副葬品までも機械的に「配布品」とはできない。実際、長茎短剣は小規模古墳に偏在しており（菊地2008）、初期ヤマト政権との関係を積極的に評価することが難しい（ライアン2019）。

本例の時期がこの議論を大きく左右しており、また器物の流通を考古学的に実証することが極めて困難であるが、両者が無関係でない限り、和田東山3号墳と同じ善光寺平の大規模集落である塩崎遺跡群から酷似する長茎短剣が出土した事実については、主に二つの可能性があるだろう。すなわち、①畿内中枢部を含む他地域より入手された「同形同大」の長茎短剣を和田東山3号墳の造営主体が塩崎遺跡群の造営主体を含む善光寺平の有力（諸）集団に分与した可能性、または②善光寺平に流入した「同形同大」の長茎短剣が小地域内の有力（諸）集団間において保有・共有され、結果的に塩崎遺跡群木棺墓SK1198の副葬品にも和田東山3号墳の副葬品にも供された可能性である。



## 6 おわりに

本稿では、塩崎遺跡群出土鉄剣の法量と形態的特徴を確認した上で、その生産と流通について若干の予察を述べた。本例の出土遺構の時期が判然としないため、その流通背景を突き止めることが困難であり、採用される時期によっては、その具体的な背景も大きく変わってくる。塩崎遺跡群および和田東山3号墳の長茎短剣の入手契機が同様な背景下のものとする仮説は、更なる論証が必要であるが、他地域との比較を重ねて検討すべき今後の課題とする。鉄剣研究のみならず、地域社会における鉄器の流通と保有を考える上でも示唆的で貴重な資料である。

本稿を執筆する機会を与えてくださった川崎保氏と櫻井秀雄氏に感謝申し上げます。また、本稿を執筆するにあたり、下記の機関からご高配を賜った。末筆ながら記して謝意を表す。長野県埋蔵文化財センター、長野市立博物館。本研究はJSPS特研奨励JP18F18003の助成を受けたものである。

### 註

- 1) 長野県埋蔵文化財センターの櫻井秀雄氏にご教示頂いた。
- 2) 短茎と長茎は、茎部長7cmを境に分類される(岩井2007、杉山2015、ライアン2017ほか)。
- 3) 身部厚6mm未満、茎部厚5mm未満のものを薄手、それ以上のものを厚手と分類される(杉山2015、ライアン2019・2021)。
- 4) 全長23cm~24cmを志向する背景としては、当時の尺の意識が働いていたのではないかと考えられる。

### 引用文献

- 岩井顕彦 2007「北近畿出土弥生時代鉄剣の再検討」『物質文化』84 物質文化研究会
- 岩本崇 2006「古墳出土鉄剣の外装とその変遷」『考古学雑誌』第90巻第4号 日本考古学会
- 川畑純 2015『武具が語る古代史』京都大学学術出版会
- 菊地芳朗 1996「前期古墳出土刀剣の系譜」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会
- 菊地芳朗 2008「成塚向山1号墳出土鉄製品からみた東日本の前期古墳」『成塚向山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小林三郎編 2020『長野市和田東山古墳群の研究—和田東山3号墳発掘調査報告—』長野市教育委員会

- 杉山和徳 2008「東日本における鉄剣の受容とその展開」『古文化談叢』60 九州古文化研究会
- 杉山和徳 2015「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」『考古学研究』第61巻第4号 考古学研究会
- 杉山和徳 2016「長茎短身鉄剣に関する一考察」『埼玉考古』第51号 埼玉考古学会
- 鈴木崇司 2020「弥生時代の東日本出土鉄製武器にみる鉄器製作技術」『考古学研究』第67巻第3号 考古学研究会
- 豊島直博 2004「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号 日本考古学協会
- 豊島直博 2008a「古墳時代前期の剣装具」『王権と武器と信仰』同成社
- 豊島直博 2008b「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』第22号 群馬考古学研究会
- 福島孝行 2007「弥生墳墓における鉄剣の副葬(一)—丹後地域—」『考古学に学ぶ(Ⅲ)』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 村上恭通 1999「鉄製武器形副葬品の成立とその背景」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古会
- ライアン・ジョセフ 2017「長茎短剣の成立過程」『古代学研究』212 古代学研究会
- ライアン・ジョセフ 2019「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相—吉備地域を中心に—」『日本考古学』49号 日本考古学協会
- ライアン・ジョセフ 2021「弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再検討」『考古学研究』第68巻第1号 考古学研究会

### 図版出典

- 第1図：筆者実測(長野県埋蔵文化財センター)
- 第2図：1 筆者実測(長野県埋蔵文化財センター)  
2 筆者実測(長野市立博物館)